
電子錠

かなめ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

電子錠

【コード】

N0676C

【作者名】

かなめ

【あらすじ】

“窃盗犯は誰か？” 気晴らしに書いた犯人当て小説です。*誤字

修正

問題編（前書き）

気晴らしに書いた犯人当て小説です。

フェアプレイにはかなり気を使ったつもりですが……
かなり際どい手を使っております。

* 誤字修正

問題編

あれは昭和二十四年の、冬の事でございます。

私はその冬、北陸の温泉宿にしばらく滞在しておりました。

さて、ある朝私が、ロビイのソファでのんびんくらりと新聞を読んでおりますと、後ろから「やあ中西君」と、聴き覚えのある声がいたします。後ろを振り向きますと、大学時代の旧友、斉藤文次郎君がにこやかな表情で立っておりました。

私は心の中で顔をしかめました。と云いますのも、この斉藤君、大学時代から実に嫌味な奴なのです。

「いやいや、久しぶりじゃあないか。いったい君は今何をしているんだい？」

「なあに、旅から旅への風来坊さ」

斉藤君は私の前のソファにどっかりと腰をおろしました。

「ほう、すると行商人かい」

「まあそんなところかな。宝石や絵画は富豪が高く買ってくれるんだぜ」私はそう答えました。

私たちはしばらく談笑しておりました。斉藤君は昔のままで、やはり嫌味な奴でございます。時折蹴飛ばしたくなる事があるくらいです。私はどうにもこの斉藤君が好きになることが出来ないのです。

話を聴いている内に、斉藤君の旅行の目的が、骨休めを兼ねてこの辺りの知人に会いに来たのだそうで、今日の五時に会う約束だと聴きました。この斉藤君、どう云う訳か友人がたいそう多いのです。私にはそれが不思議でなりません。

其の内に斉藤君は、散歩に行こうと云い出しました。私は乗り気ではなかったのですが、ついに断りきれないで、午後から散歩に出る約束をさせられました。

一度斉藤君と別れた私は、部屋に戻ると何冊か本を読んで過ごしました。私は読むのがたいそう速いものでございますから、午前の間二冊の本を読了いたしました。

昼食を早めに運んでもらって、約束の時間より少し前に玄関に行きますと、気の早いことに斉藤君は、既に待つておりました。

「やあ待つたかい？」

「いいや、さあ行こう」

斉藤君はそう云いますと、先に立つて外に出ていきました。

冬の北陸のことでございますから、外は一面雪景色です。試しに手ですくってみますと、上質の小麦粉の様なさらさらとした粉雪が、指の間をすりぬけて行きました。

何も無い道を私と斉藤君が「キュッキュツ」と雪を踏みながら歩いて行きます。太陽の光を雪が反射して、何とも幻想的な雰囲気でした。

ふと、斉藤君が歩みを止めました。何かに目を捕われている様です。「何だろう」と、私も其処に目をやりますと、なかなか立派な別荘が目に入りました。大き目のログハウスの様な其れは、どうやら貸し別荘のようでございます。

「立派なもんだね」そう斉藤君がぼつねんと呟きました。

「どこぞの富豪が借りるんだろうな。まあ僕らには高嶺の花だよ斉藤君」私はそう云うと、また歩を進めようとしたしました。

すると、前から一台の高級そうな純白の車がこちらにゆつくりと向かってるのが見えました。私は思わず足止めて、その車をちよつとの間眺めておりました。

車は私たちの横までくるとゆつたりと止まり、運転席の窓がしずしずと開きます。たじろいだ私たちに、「やあこんにちは」と、運転席の男性は実に心地の良い挨拶をかけてきました。年は五十過ぎと云ったところでございますか。浅黒く、皺の少ない若々しい

肌には人懐っこい笑みを浮かべています。恰幅は別段悪いと云うわけではないのですが、あまり無駄な脂は付いていない様に見える。隣には、灰色の和服を着込んだ髪の毛の長いそう美しい女性が座っております。どうやら男性の細君の様です。

「この別荘の方ですか？」私がそう問いますと、男性は「ええそうなんですよ。京都の不動産屋から、一昨日借り受けて今初めて来たんですがね、なあに大した金額ではありませんでしたよ。よろしければ上がって行きませんか？ 袖振り合うのも何かの縁と云いますし」そう云ってにつこりといいたしました。

斉藤君からは別に異論は出ませんでしたから 五時にはまだ時間がございました 私たちはお邪魔させていただく運びになりました。

男性は南田と名乗りました。南田氏は荷物を寝室に置くと、私たちを食堂に通してくださいました。

ログハウスなので、内装は当然西洋風です。食堂には大きなテーブルがありまして、カウンタアを挟んだ処に小綺麗な台所がございます。さしずめ“ダイニングキッチン”とでも申しましょうか。ソファ等の応接セットもあつて、私たちは真つ直ぐそこへ座りました。

富豪の家を訪ねるのは、私は仕事柄何度もあつて、別段緊張もいたしませんでしたが、斉藤君の方へと云うと、やたらと周りを見渡して、落ち着きがありませんでした。

細君の運んでくださった珈琲は、たいそう美味しゅうございます。南田氏はたいそう人懐っこい性格の様で 初対面の私たちを招き入れたのもこの性格からでございます。たいそう話も面白く、私たちは楽しい一時を過ごしました。そしてやがて、話題が各々の仕事の話になつて行きました。

「南田さん、この中西君はですねえ、旅から旅への行商人なんです」

「ほう」南田氏は興味を持った様子で、「何を売り歩いているのです？」と私に尋ねましたので、私は話を合わせました。

「そうですねえ、絵画や宝石が中心でしょうか」そう私が答えましたと、「そいつは奇遇ですなあ、私の商売は宝石商でしてね」と云いました。今度は私が興味を持つ番でございました。

「商売品は店の金庫に仕舞ってあるのですがね、個人的なものは幾つか持ってきているんですよ。ごらんになりますか？」私が是非と云いますと、南田氏は一度寝室へ行つて小さいが、立派な箱を持って戻ってきました。

箱の蓋をゆつくりと開けていきます。私と斉藤君はそれを食い入る様に見つめます。

蓋が完全に開きますと、世にも美しい石が目飛び込んできました。私はあれほどすばらしい物を見たことはありません。あの時の感動と云つたら！言葉にしようがありません。

「キヤッツアイですね」私は思わず溜息をつきました。

「そうです。これは私の自慢でしてね。家内の次に大事なものですよ」そう云つと南田氏は笑みを浮かべました。

宝石には無知の斉藤君も、これにはうっとり見惚れている様でございました。

「保険なんかはかけていらっしゃるのですか？」私がそう訊きますと、南田氏は、

「いやあ、この宝石の価値と比べれば、保険金なんて雀の涙みたいなものですから、毎月の保険料が馬鹿らしくてかけていないんですよ。その分普段は自宅の金庫に金を使って嚴重に保管しているんです」

時計が鳴つたのはその時でした。壁がけの鳩時計が鳴つたのです。文字盤を見ると、時間は午後五時でした。

「あ、いけないいけない。僕はお暇します。人に会う約束があるもので」そう斉藤君が云いますと、南田氏は実に残念そうな顔をいた

しました。玄関先まで南田氏や彼の細君が見送ろうとするのを、斉藤君が遠慮して押し留め、ここに座ってから一度も立っていないかったからか、一つ伸びをしてから、真つ直ぐ食堂を出て行きました。私は時間はありますから、もう少しお邪魔することになりました。細君の淹れてくれた珈琲のお代わりを飲みながら、またしばらく談笑を楽しみました。結局、私が暇を告げたのは午後六時を過ぎてからでございました。

「もう少しゆっくりされたらよろしのに」細君が云いました。

「いえ、これ以上お邪魔する訳には……」そう私が云いますと、南田氏は、

「また明日にでもいらしてください」と、例の人懐っこい笑顔で云いました。

では、と扉を開けようとして、はたと手を止めました。

「どうされました？」そう南田氏は尋ねます。

「これは珍しい。「電子錠」ですね」

「電子……錠？」

「ええ、最近開発された技術でしてね。扉が閉まると、電気仕掛けで自動的に鍵がかかって内側からは開くのですが、外からは開かないのですよ。つまり戸締まりをしわすれる事が無いと云う訳です。

海外では“オートロック”と云うそうですよ」

「ほう、そいつは便利ですなあ。不動産屋は云ってませんでした。そんなに便利な物が付いていたとは」南田氏はいたく関心した様でした。

「では僕は失礼します。物騒ですから、くれぐれも窓の戸締まりを忘れませんように」私はそう云って笑うと、宿への帰りにつきましました。

翌日、私はあの別荘の近くを歩いておりました。すると、何やら警察車両が道を走っているのが見えました。別荘の方に向かった様です。

別荘に行ってみますと、先ほどの警察車両が駐車していて、戸口のところで扉を開けたまま、南田氏と細君、そして制服を着た警官が何やら話しておりました。

「ああ中西さん！」南田氏が私に気付いた様です。

「どうなされたのですか？」私はそう云いながら、彼らのところに歩み寄りました。

「宝石が！ 宝石が！ あのキャッツアイが盗まれたのです！！」

「なんですって！」

「今朝目が覚めたら備え付けの金庫が破られいたんです。そして一番高いあのキャッツアイが！ 誰かが盗んで行ったのです。ああ私の宝が……妻の次に大切なあの宝石が……」

「戸締まりはしていなかったのですか？」私がそう尋ねます

「ちゃんとしていました」細君が心外だと云う風に云いました。

「すると、窓を割られたわけですか？」警官がそう尋ねます。

「いいえ、主人と二人で調べましたが、窓にはどれも異状はありませんでした。扉はこの正面の扉だけなのですが、それもこじ開けられた形跡はありませんでした。先ほども中西さんにも云いましたが、窓の戸締りはちゃん確認いたしましたし、扉は確認するまでもありません」

「何故です？」

私は昨夜と同じ事を警官に話しました。

「ほお、そんな物が……」いたく感心した様です。

「扉を閉め忘れたと云う事は勿論無い訳ですよ？」私が尋ねますと、細君が「勿論です」と答えました。

「不思議だ！ 実に不思議だ！ だってそうでしょう？ 扉にも鍵がしっかりとかかっているのに、犯人はそれらをこじ開けもしないで宝石を盗み出してしまうなんて！ いや待てよ……」警官はぶつぶつそう呟くと、「失礼ですがご主人、あの宝石には保険はかけてあ

りますか？」と尋ねました。

「いいえ、かけていません。なんなら調べてみてください。……貴方はこれが狂言だと、そうおっしゃりたいわけですか？」

「しかしですね、この別荘がいわゆる“密室”であつた以上そういう可能性も考えねばなりませんので……」

「狂言ならば、窓の鍵を開けておくでしょう？ それに、なあに犯人なら分かりきっていますよ」私はそう口を挟みました。

私の言葉に驚いたのか、三人が一斉に私を見ました。

私は腰を屈めると、扉の枠の金具　金属の棒が嵌って鍵がかか
るあの受け止め金具です　をしばらく見つめると、それに指を押し
当ててぱくりと口に銜えました。

皆があっけにとられる中、私はこう云いました。

「やはり、金具が辛い」

“窃盗犯は誰か？”

尚、地の文及び窃盗犯以外の人物の供述には、一切の虚偽が含まれていないことは作者が保障する。

ここまでの全ての文章で、全ての手がかりは示された。答えは目の前にあることをお忘れなく。

問題編（後書き）

さて、“窃盗犯”は分かりましたか？
そのうち解答編を投下予定です。

それにしても文章が雑だ……

解答編(前書き)

書き上げたので更新。

ここまで酷くなる予定ではなかったのですが……

解答編

昨日語らったあの部屋で、私たちはあの人物を待ち続けました。やがて呼び鈴を鳴らす音が聴こえました。細君が戸口へ行きました。

そして、細君と警官　私が彼に頼んで呼びに行ってもらったのです　につれられて、斉藤君が部屋に入ってきました。

南田氏の勧めに従って、斉藤君はソファに腰をおろしました。彼は何事かと不安そうな表情です。

「さて、斉藤君」私は重々しく切り出しました。

「昨日の見たものを覚えているかい？　あの素晴らしい宝石だよ」

「ああ良く覚えてる」

「あれが盗まれた」
すると彼は「えっ！」と頓狂な声を出し、大きく目を見開きました。

「しかもだね斉藤君。この家の窓は昨夜細君が確認し、今朝も二人で確認してみたそうだが鍵がしつかりとかかっていたそうだ。割られてもいない。扉にもこじ開けられた形跡もない。さらにこれは電子錠と云う代物でね、鍵の掛け忘れはありえないのだよ。」

君は探偵小説を読むかい？　これはいわゆる“密室”だよ斉藤君。不思議じゃないか、一体全体犯人はどうやって侵入したのだろうね？

そこまで云うと、私は斉藤君の表情を見ると、彼はさも不思議そうな顔をしております。

「斉藤君、君の考えを訊きたいんだがね？」

そう私が云いますと、斉藤君はしばらくの後答えました。

「すると……二人には失礼だが、南田氏か細君の狂言と云う事になるんじゃないか」

云いながら彼は二人の姿を眺めました。

「ほう、すると動機はなんだろう？」

「保険金だよ。きつと高い金を受け取る手はずなのさ」

「ありえないよ。あの宝石には保険金は掛けられちゃいない。昨日の会話を忘れたのかい？」

斉藤君は「ううん」と唸ると、また別の可能性を提示しました。

「ならば気を引きつけたのだよ」

「気を？」

「そうだ。細君は南田氏の気を宝石から自分にそらすたかったのだ。だから宝石を隠した。どうだい？ 辻褄が合うだろう？」

「合わないよ。氏は“この宝石は妻の次に大事な物”だと云っていたじゃないか。彼は細君を実に大事にしているのだよ。

そもそもね、これは先程お巡りさんにも話したんだが、狂言ならば窓の鍵を開けておくはずだよ。密室になんてするはずがないんだ。狂言はまずありえないよ」

私はゆっくりと斉藤君と目を合わせました。

「するとおかしいじゃないか。一体全体誰が……」

「君だよ。盗めたのは君しかない」

斉藤君は一寸の間口をポカンと開けていましたが、やがて笑い出しました。

「こいつは傑作だ！ 君、どうして僕になるんだ？ 全くおかしな

冗談はよしてくれ」

「冗談じゃないさ。状況から考えて、君でしかありえないんだ」

すると斉藤君からすうつと笑みが消え、

「いい加減にしたらどうだ。僕がどうやって盗みを働いたと云うんだ」

「雪だよ。君は雪を使ったんだ」

「雪だつて？」 斉藤君は呆れたように声を出しました。

「そうだ。扉の枠には鍵を受け止める金具があるだろう？ 君は其

処に雪を積めて鍵が掛からないようにしたのだよ」

「あんなサラサラな粉雪で、そんな事できるわけが……」

「塩を使えば簡単だよ。塩をつけると雪は凝固して非常に硬くなるんだ。夜が明けたから気温が上がってもう雪は溶けてしまっていたんだが、舐めてみるとね、辛かったんだよ」

齊藤君から、血の気が引いていくのを見てとれました。

「そんな……だったら、だったら君だって……」

「僕にもできた筈だと云いたいのだろうか？ 僕には無理なんだよ。

何故なら僕が帰る時にはこの親切な御兩人にが戸口のところまで見送ってくれたからね。ところで……君の時はどうだったかな……？」

「違う、僕じゃあ……」

「齊藤君、犯人は君でしかありえないのだよ」

思わず逃げ出そうとした齊藤君を、警官はたちまち取り押さえ、署に連絡して齊藤君を事情を訊く為に連れて行ってしまいました。

南田氏が是非とも礼をしたいと云うのも私は辞退して、その日の内に宿を出ました。

二時間ばかり車を走らせると、少々疲れてしまつて、車を脇道に止めて一息つく事にしました。

クッククッククック……

私は笑いをこらえ切れなくなりました。齊藤君が帰つたあの時に思いついたこの計画が、あまりにも上手くいったからです。

あの警官はともかく、他の三人なら少し考えれば分かる事なのです。齊藤君はあの別荘を訪ねて初めて宝石の存在を知ったのですから、塩を持ってきていた筈が無いのです。

そして齊藤君はあの部屋に入って真つ直ぐソファに座り帰る時まで一度も立つ事は無く、真つ直ぐ部屋を退出したのです。つまり彼には塩を手に入れるチャンスは無かつたのです。

さて、あの夫婦の狂言でも無く斉藤君の仕業でもない、つまり犯人は……

「クツクツクツ……それにしても電子錠とは！ 我ながら面白い事を考えたものだ。そんな魔法みたいな物があるはず無いのに！ クツクツク……」

電子錠、つまりオートロックの開発が始まったのは1960年代の事ですから、当時はまだそんな物は存在しなかったのです。

「哀れな斉藤君は今頃何をしているのだろう……」そんな事を考えながら、泥棒の私は戦利品を眺めました。

了

解答編（後書き）

いかがでしたでしょうか。
今回は完全に失敗したと思いますので、自作では改善して行きたいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0676c/>

電子錠

2008年11月7日06時44分発行